

専門書が出版されるまでの 編集者の思考と行動

編集者はどのように校正・校閲しているか

日科技連出版社

鈴木兄宏

JaSST Review'20 2020年10月26日

はじめに

講演のきっかけは、実行委員の安達先生に「他業種の話が役に立つから」と電話で口説かれたこと。**安達先生の原稿に対する私のコメントが勉強になった**とのこと。しかし、**当たり前にやっていることを説明するのは難しい。**うまく説明できる自信がない。

正直なところお断りしたかった。「手本にはなれないが、見本くらいにはなれる」(五木寛之『知の休日』集英社新書、1999年)という高光大船和尚(1879–1951年)の言葉を思い出して決意。

格好良く見せようとする気持ちが「断りたい」という気にさせている。**善し悪しは別に「見本になればいいや」と考え直した。**

見本なので、自分の身のまわりに置き換えてみて、考えていただきたい。

【注】講演内容は、私個人の体験によるもので日科技連出版社の見解ではありません。

目次

1. 自己紹介と会社紹介
2. 聞くも涙語るも涙、『実践ソフトウェアエンジニアリング』刊行秘話
3. 編集者としての原点
4. 実録！『品質重視のアジャイル開発』の編集舞台裏
5. 専門書の編集とはどのようなものか
6. 何に留意して原稿を読んでいるか
7. 難しい原稿に当たったとき
8. 編集者に求められる能力
9. 出版界の現状とお願い

6と7が今回のテーマに
直接かかわる部分
3～5はその伏線

1. 自己紹介と会社紹介

- 略歴
- 日科技連出版社の紹介
- 刊行図書の紹介
- 編集した本の紹介(一部)

略歴

鈴木 兄宏（すずき よしひろ）

株式会社日科技連出版社 取締役 出版部長

1996年4月 株式会社日科技連出版社入社。出版部製作グループに配属

2000年1月 同 出版部編集グループに異動

2018年4月 同 出版部長

2020年3月 同 取締役 出版部長

編集業務の傍ら社内の情報システムを担当

日科技連出版社の紹介

1955(昭和30)年 株式会社JUSE出版として創立

「日本のマグローヒル(McGraw-Hill)を目指す」という志の下、日科技連を出版活動によって支援する目的で創立

1966(昭和41)年 株式会社日科技連出版社に社名変更

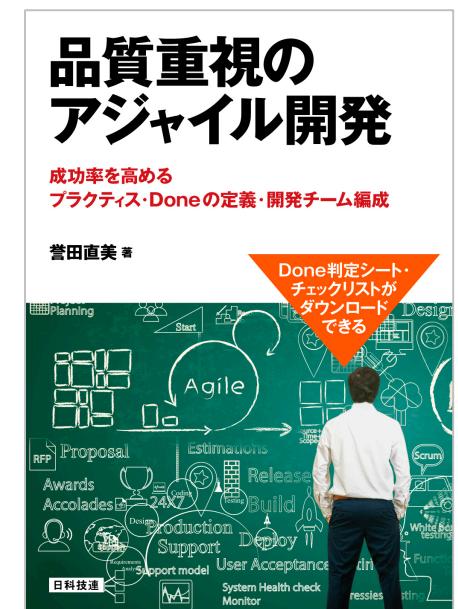
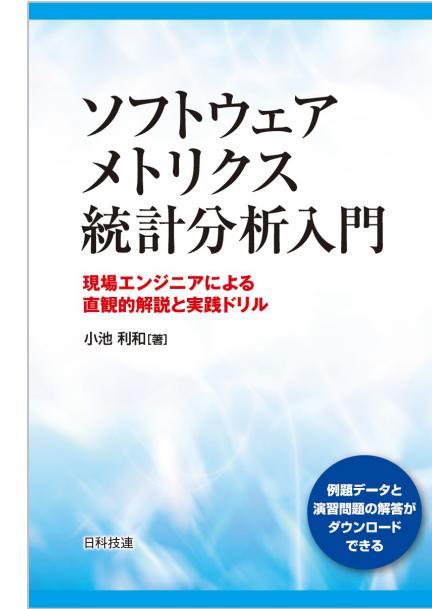
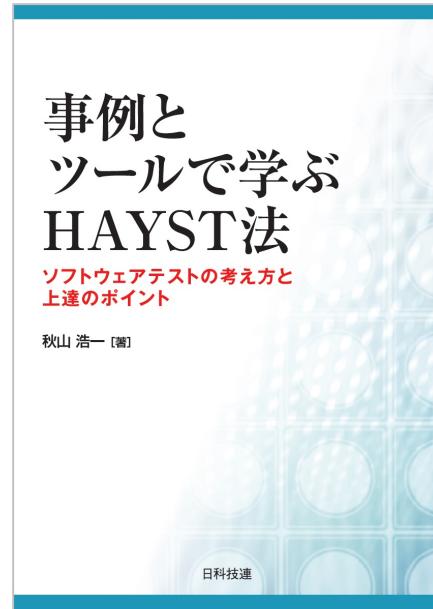
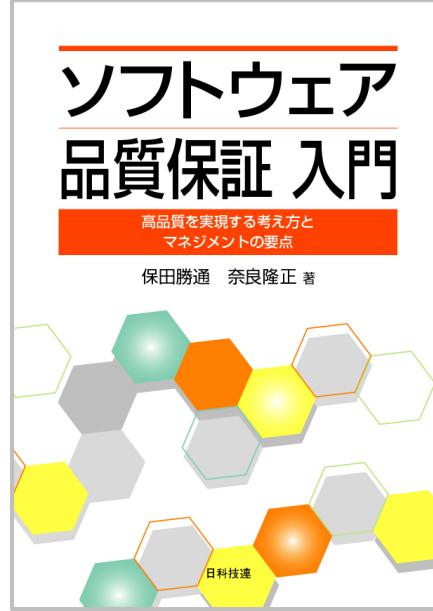
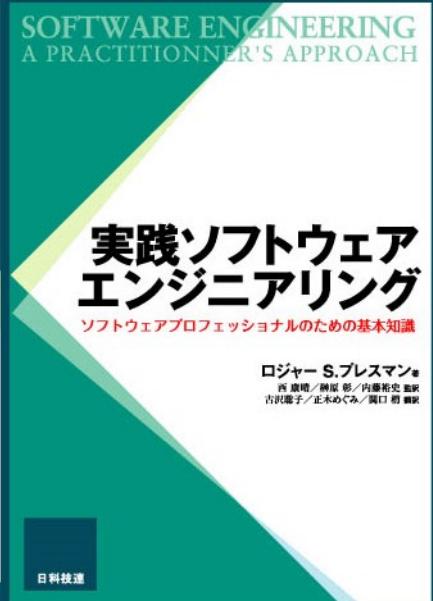
品質管理・品質保証を中心に科学的な経営管理技術の産業界への普及・啓蒙・発展を目的とした書籍、雑誌、DVDなどの視聴覚教材、手帳類など幅広い出版活動を展開

編集した本の紹介(一部)

統計や、品質管理、情報セキュリティ、内部監査の本を多数編集。

ソフトウェア関連書としては、

『実践ソフトウェアエンジニアリング』(プレスマン著、西・榎原・内藤監訳)、
『ソフトウェア品質保証入門』(保田・奈良)、『ソフトウェア品質会計』(誉
田)、『ソフトウェアテスト技法ドリル』(秋山)、『ソフトウェアプロセス改善手
法SaPID入門』(安達)、『データ指向のソフトウェア品質マネジメント』(野
中・小池・小室)などを編集



2. 聞くも涙語るも涙 『実践ソフトウェアエンジニアリング』刊行秘話

- ◆青天の霹靂、翻訳途中で最新版が刊行
- ◆著者と会社の間で板挟み
- ◆編集者は人たらしが向いている
- ◆コミュニケーション方法についての教訓



青天の霹靂、翻訳途中で最新版が刊行

講演当日に投影

著者と会社の間で板挟み

講演当日に投影

編集者は人たらしが向いている

講演当日に投影

失敗から得た教訓

講演当日に投影

3. 編集者としての原点

- ◆ 編集の仕事は真似して覚えた
- ◆ 自己流の確立「編集者は事務屋になってはいけないよ」
- ◆ 事務屋から編集者へ
- ◆ コミュニケーション力の養い方
- ◆ 校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案
- ◆ 物は言い様

編集の仕事は真似して覚えた

多くのことは先輩編集者たちの仕事ぶりを真似ることで覚えた。活版時代からの編集者は職人気質。個々の良さを学べたのは幸運だった。

- 議事録の作成であれば、「校正記号」と「校正の入れ方」
- 原稿であれば、読みやすい文章にする朱字(編集・校正)の入れ方
- ゲラ刷りであれば、自分では気づかない誤字脱字。見た瞬間に発見する神業

部下のメールを添削した例

講演当日に投影

編集技術・技能の向上と効率化(1/3)

◆やるべきことは意外と絞られる

今でこそやらなくなつたが、自分が直せなかつた原稿や見つけられなかつた誤植などは、その直し方なり、見逃した誤植を集めた。

そうすると、原稿を直すパターンがあることに気づいた。

また、誤植であれば、専門分野の本であるため、間違えやすい用語も案外限定され、用字用語の統一という作業にしても、意外と限られることに気づいた。

【注】用字用語の統一とは、基本的な編集作業の一つ。一冊の本で、同じ意味の文言をあれこれ変えると読者にわかりづらい。送り仮名の統一なども含む。

編集技術・技能の向上と効率化(2/3)

◆手を汚す(汗をかく)

- ちなみに、このようなことを試したのは恩師の狩野紀昭先生から「職人の世界だったら一人前になるのに10年以上かかるだろう。そうではないのだから……」と言われたことが切っ掛け。
- 狩野先生は卒論指導において能書きを並べるだけの怠惰な学生に対して「手を汚したのか！」と活を入れていらっしゃった。もちろん、私も言われた口。補足すると、決して悪さをするという意味ではなく、汗をかけということ。
- そういう経験があったので、面倒くさいと感じることはなかった。アナログの作業なので今どきの人は嫌がるかもしれない。

編集技術・技能の向上と効率化(3/3)

◆編集作業の自働化への挑戦

やるべきことは意外と限られることに気づいてからPCである程度業務を自動化できる見通しが立ち、テキストエディタの正規表現を使って、一括置換するプログラムなども作った。

ところが、著者原稿はWordファイルなので効率が悪く、止めてしまった。

現在は、必要に応じてWordのマクロで変換しているが、素人のプログラムなので途中で止まることがあり、部下に展開できていない。また、変換のロジックを知らないと、著者原稿を滅茶苦茶にする恐れがあるという事情もある。そういう意味では「**自働化**」の道具。

脚注やオブジェクト内は変換できないという欠陥がある。オブジェクト内の文字の読み込み方がわかれればなあ、というところ。

自己流の確立(1/2) 「編集者は事務屋になってはいけないよ」

◆真似には限界がある

著者との接し方や話し方、印刷会社の担当者とのやり取り(コミュニケーション)の仕方も、上司や先輩のすることを真似ることから始めた。

ところが、真似たつもりでもうまく行かないことがしばしばある。特に、著者との話し方や印刷会社の担当者とのやり取りというやや高度なコミュニケーション力が試される場面はただ真似るだけでは通用しない。高度などというのは、「はいですか」とはご了解いただけない場面。

こういう場面では自分の個性に合わせた無理のないコミュニケーションのとり方をしないと、どこかぎこちなく説得力のないものになるような気がする。人格のような要素もあるかもしれない。

自己流の確立(2/2) 「編集者は事務屋になつてはいけないよ」

◆「事務屋になるな」という教え

尾花利一さんという取次会社大手の日販を定年退職後に当社に入社された方がいらっしゃった。

尾花さんについて書店を回ったときに「編集者は事務屋になっちゃいけないよ」と言われた。そのときはどういう意味か理解できなかつたが、今では言わんとするところを察することができる。たぶん通り一遍の仕事をしているように見えたのでしょう。

著者を動かそうとするならそれではダメ。ただ単にノルマを果たせば良いのではなく、「良い本を創りたい」などの魂が入った仕事をしなければならない、という教え。

【注】取次会社とは本の問屋。出版社と書店の間で、物流や金融の機能がある。

事務屋から編集者へ(1/2)

◆事務屋は諦めが早い

部下を見ていると、著者から言わされたからこうするとか、上司に言わされたからこうする、などという理由付けで仕事をしている者がいる。このようなタイプが事務屋。「自分がどうしたい」というのがない。だから言わしたこと以上のことがない。すぐに諦める。

なお、「事務屋」とは、決して「事務職」の方々を揶揄する意図ではないことをお断りしておく。

事務屋から編集者へ(2/2)

◆叩き上げの編集者

これを突き破るために部下には「君はどういう本を作りたいの？」と問い合わせる。ときには、「君はこういう本を創りたいのではないの？」と煽る。たぶん部下からは「ウザイ(鬱陶しい)！」と思われているはず。かつての上司・清水彦康元取締役もそういう編集者。言ひ方は違うが、随分煽られた。

何かを創る(クリエイトする)仕事は、時間を忘れて一心不乱に取り組まなければならぬときがある。冒頭に紹介した『実践ソフトウェアエンジニアリング』はボリューム(B5判・680ページ、49字×44行=2,156字)、出版時期を考えるとそうせざるを得ない状況に置かれていた。訳者の先生方の熱が伝播して私も駆り立てられるように仕事をした。

このように学びというのは森羅万象、至るところにアンテナを張り巡らせれば、師匠とすべき人を見つけることができる。

「自己流」とは

自己流とは、闇雲な方法ではなく、自分に合ったやり方のこと。

例えば、リーダーシップのとり方について考えたとき、私のようなひ弱そうな者（優しそうとも言われる）が、軍隊式に「俺に着いてこい」と言っても着いてくる人はいないはず。私も自分の性格として軍隊式のスタイルはとても真似できない。ときには「軍隊式」を繰り出さなければならないが、多くの場合、理詰めで説得していくスタイルをとる。

目標・目的を達成するためには何が必要で、メンバーにはこうしてほしいなどという具合に打ち出す。また、できる限り本人ができるようになる手助けすることを中心としたリーダーシップ。性に合っているのか自然に振る舞える。

コミュニケーション力の養い方

リーダーシップのとり方と同様なことが、コミュニケーションのとり方についてもいえる。やり方はいろいろあっていい。

コミュニケーション力は、編集者に必要な能力の一つだが、これを身に付けるのは難しい。私自身、今でも不十分だという自覚がある。

コミュニケーション力を身に付けるには、そういう力を持っている人と一緒にいる時間をつくることが有効。会社の人である必要はない。至るところに師匠(メンバー)となる人はいる。極端な話、酒場のカウンターで隣り合った人だってよい。

私自身、行きつけの店で隣り合う方と一緒にやりながらさまざまなコミュニケーション術を学んでいる。

校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(1/8)

◆気づかせることは難しい

編集者は校閲において、「何か問題はないか？」という粗探しをしているが、その問題点をどのように著者に伝えるかは細心の注意を払う。なぜなら、著者が脇を曲げたらアウトだから。

編集者の役割は「著者を手助けすること」なので、何が問題で、どうすれば良いのか、「必須」と「推奨」に分けて説明していく。

推奨の部分は、編集者の好みも入るのでゴリ押しはしない。すべてを説明すると時間が足りないので、朱字を入れた原稿を渡して、そのポイントのみをお伝えし、最終判断は著者に委ねる。

【注】校閲とは、原稿や校正刷りを吟味して誤りや不備を正すこと。校正と異なり、主に内容上の問題点を点検する。

校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(2/8)

安達賢二著『ソフトウェアプロセス改善手法SaPID入門』の原稿を例に校閲を紹介



校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(3/8)

校閲の例：箇条書きのような文章から段落をつくる

講演当日に投影

校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(4/8)

校閲の例: 読者なら欲しいだろうものを提案

講演当日に投影

校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(5/8)

校閲の例：誤用の疑い

講演当日に投影

校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(6/8)

校閲の例：重複を削除

講演当日に投影

校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(7/8)

校閲の例: 例示の加筆依頼、通じる文言か否か

講演当日に投影

校閲では「必須」と「推奨」に分けて提案(8/8)

校閲の例:著者の真意を深掘り

講演当日に投影

物は言い様(1/3)

◆著者を説得する

著者を説得するのに一番効果があるのは、「この文章で読者に伝わるのか」という視点。このことが著者に伝わるように工夫する。

例えば、難しい語句を使った文章であれば「下々の者にもわかるようにもっと平たい表現にしてください。具体例を示してください」などと言ったりする。読者を「下々の者」と言っているのは、一般に著者となる方々は非常に高度な知識や技術を持っているので間接的に著者を立てることになる。

「自分の役割は何なのか」ということを考えればこういう「相手を立てる」言い回しを工夫するようになる。

物は言い様(2/3)

◆自分の役割を考える

私が入社して1～2年目の頃、社長から「パソコンの使い方がわからないから教えてくれ」と乞われた。

自分では教えたつもりだったが、「自分の役割を考えて仕事をしなさい」と言われた。この教えは私の入社を決断された併和輝英社長からいただいたもの。

恐らく若造の訳のわからない説明にご立腹だったのではないかと思うが、怒るのではなく、間接的な表現で私の仕事をたしなめた。これも物は言い様といえる。

物は言い様(3/3)

◆相手に伝わらなければ意味がない

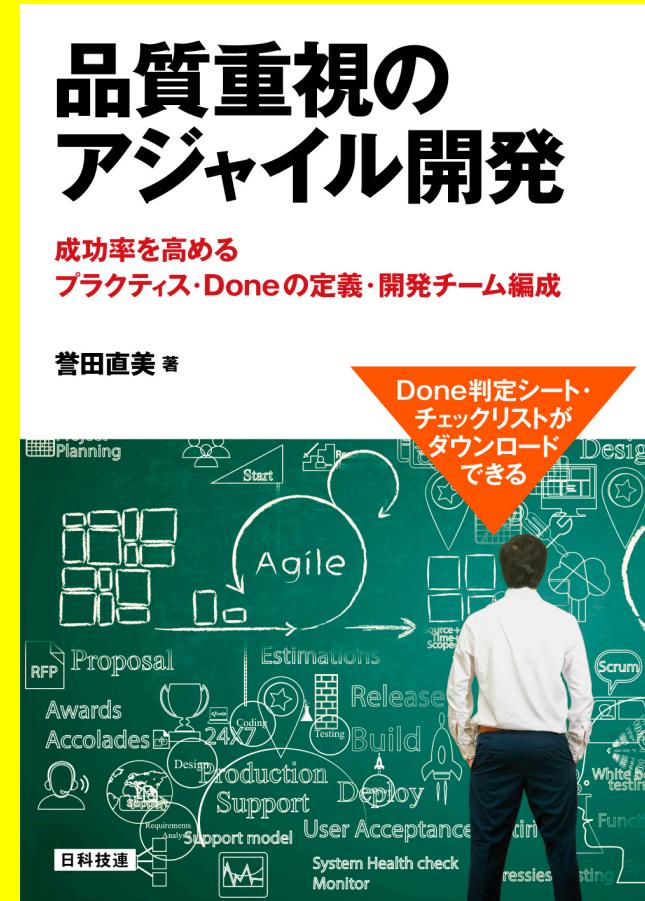
思い返せば、パソコンの使い方がわからない原因は「カタカタ用語についていけない」というところにあった。ところが、私はカタカナ用語を遣って説明するのだから用をなさなかった。

相手が理解できる言葉で、ニュアンスが伝わる話し方でコミュニケーションを図ることが大事であることを学んだ。もっとも、気づいたのは随分後のこと。

編集者のくせにコミュニケーションの話ばかりして変な奴だと思われるかも知れないが、次に紹介する事例で、問題を見つけることと同じくらい伝え方が重要であることをご理解いただけたのではないかと思う。

4. 実録！ 『品質重視のアジャイル開発』の編集舞台裏

- ◆ 誉田直美先生との仕事
- ◆ かなり大雑把な出版プロセスの紹介
- ◆ 第1稿でのやり取り
- ◆ 「まえがき」原稿の校閲
- ◆ 再校ゲラの校閲
- ◆ 答えは著者の頭の中にある



齋田直美先生との仕事

齋田先生とのお付き合いは『ソフトウェア品質会計』(2010年)以来。

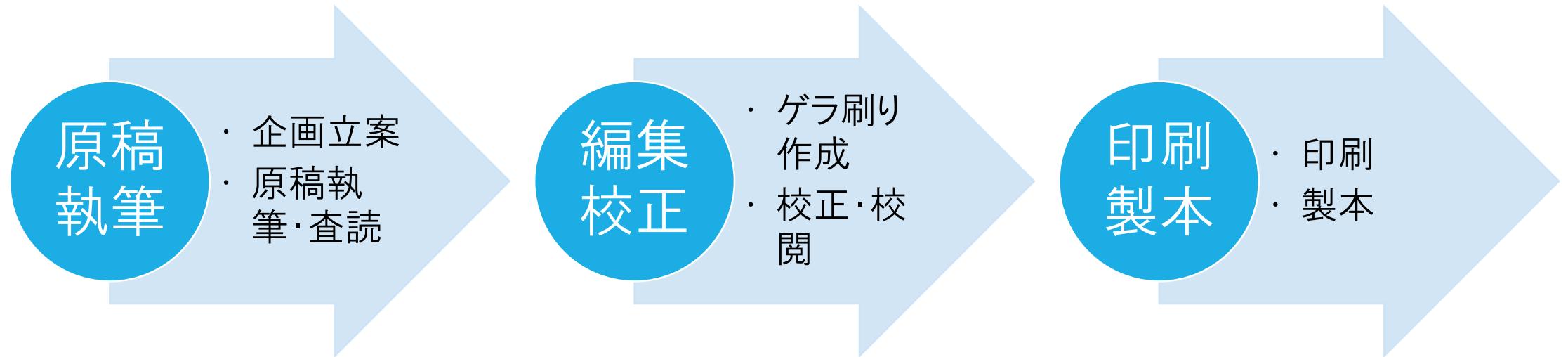
本が完成したときの話で、原稿やゲラに入れたコメントについて先生から

講演当日に投影

講演当日に投影

という趣旨のお言葉をいただいた。

かなり大雑把な出版プロセスの紹介



【注】

ゲラとは、①galley(英)がなまつたもので、活字組版を収める薄い箱のこと。②ゲラ刷りの略称。

ゲラ刷りとは、校正刷りのこと。

第1稿でのやり取り①：鈴木のコメント(1/2)

鈴木からのメール

講演当日に投影

第1稿でのやり取り①：鈴木のコメント(2/2)

鈴木からのメール

誉田先生からいただいたコメント

講演当日に投影

第1稿でのやり取り①：鈴木コメントの解説

講演当日に投影

第1稿でのやり取り②：誉田先生のコメント^(1/2)

誉田先生からのメール

講演当日に投影

第1稿でのやり取り②：誉田先生のコメント^(2/2)

講演当日に投影

「まえがき」原稿の校閲(1/3)

講演当日に投影

より良い表現を考えて提案する。

「まえがき」原稿の校閲(2/3)

講演当日に投影

自分の感覚を率直に伝える。

「まえがき」原稿の校閲(3/3)

講演当日に投影

再校ゲラの校閲(1/4)

目次(見出し)の修正案と加筆依頼。「メトリクス」だけではわからない。

講演当日に投影

再校ゲラの校閲(2/4)

講演当日に投影

再校ゲラの校閲(3/4)

適切な日本語か？

講演当日に投影

再校ゲラの校閲(4/4)

本文の内容から対称性をもたせたい。美的感覚

講演当日に投影

答えは著者の頭の中にある(1/5)

鈴木からのメール

講演当日に投影

答えは著者の頭の中にある(2/5)

畠田先生からのメール

講演当日に投影

答えは著者の頭の中にある(3/5)

◆副題の検討

講演当日に投影

答えは著者の頭の中にある(4/5)

◆副題の変遷

講演当日に投影

答えは著者の頭の中にある(5/5)

◆編集者冥利

講演当日に投影

品質重視の アジャイル開発

成功率を高める
プラクティス・Doneの定義・開発チーム編成

菅田直美 著



5. 専門書の編集とはどのようなものか

- ◆ 編集を料理に喩えると
- ◆ 本創りとは著者と二人三脚の仕事
- ◆ 私の編集ポリシー
- ◆ わかりやすい文章

編集を料理に喻えると

編集の現場においては、著者の原稿をどのように編集するかを考える。料理に喻えるなら原稿は素材である肉や魚。それをどう調理するかが編集にあたる。

切り刻んだり、味付けしたりして、味見をする。「**原稿を読まない編集者は味見をしないコックと同じ**」という文章が、当社の社内教育メモに残っていた。

編集を料理に喻えると

原稿	肉や魚などの素材そのもの
編集	調理すること
本	ハンバーグ、ビーフシチュー

本創りとは著者と二人三脚の仕事

著者にもいろいろな方がいらっしゃって、「俺の原稿に勝手に手を入れるな」という方もいらっしゃれば「どうぞ好きなように直してください」という方もいらっしゃる。

好きなようにと言いつつも、何かしらの拘りがあるのが普通なのでそこを探らなければならない。

どのような著者であっても編集者の著作ではない以上、勝手に直すということは考えらない。なぜなら、単行本の責任は「著作者」にある。出版したことで何か起きればその責任は著作者がとらなければならない。

したがって、原稿やゲラ刷りに朱字を入れて、修正や加筆の提案し、出版したときに問題が起きないように双方が確認しながら作業を進めていく。

私の編集ポリシー

専門書出版における編集者の役割の一つは、「著者の主張（言いたいこと）を、読者が読み間違えず、しかもできるだけ理解しやすい本になるように著者を手助けすること」だと考えている。

もちろん、原稿に文法上の誤りや事実誤認、法律上・倫理上の問題がないかなどについても目を光らせている。また、原稿にはない、読者だったら知りたいであろうこと（喜ぶこと）を想像して加筆を依頼することもある。

これらの過程において編集者の個性が發揮され、たとえ同じ著者が書いた原稿であっても違った本になる。

わかりやすい文章

わかりにくくする原因是意外と典型的で、例えば、

講演当日に投影

など。

こういうことを防ぐために著者には「執筆要領」として依頼する事項をまとめてお渡ししている。

6. 何に留意して原稿を読んでいるか

- ◆査読時の4つの留意点とやや強引な狩野モデルへの当てはめ
- ◆読む立場のバリエーション
- ◆どのように魅力品質を引き出すか

査読時の4つの留意点と やや強引な狩野モデルへの当てはめ

- ① 企画書の狙い(特にページ数)に沿っているか確認する。【一元品質】
- ② 原稿に文法上の誤りや事実誤認、法律上・倫理上の問題がないか確認する。
【当たり前品質】
- ③ 著者の主張(言いたいこと)を、読者が読み間違えず、しかも容易に理解できるようにすることを手助けする。【当たり前品質／魅力品質】
- ④ 原稿にはないが、読者だったら知りたいであろうこと(喜ぶこと)を想像する。
【魅力品質】

狩野モデルによる品質の分類

講演当日に投影

読む立場のバリエーション(1/4)

◆6つの読む立場

- ① 編集者:ど
- ② 読者:わか
- ③ 著者:著者
- ④ 版元:当社
するなど)
- ⑤ 印刷会社:
- ⑥ 書店・取次

講演当日に投影

すべてのステークホルダーの視点で読む。

読む立場のバリエーション(2/4)

◆無意識でできるように精進する

6つの視点で読むなんて「本当にそんなことができるの？」と思われるかも知れない。

最初からできた訳ではないが、今は、無意識のうちにやっている。

始めは意識的な行動だが、長くやっているうちに無意識のうちにできるようになった。スポーツでも、楽器の演奏でも、うまくできないうちは何かに注意しながら取り組むが、できるようになると無意識のうちにやっているのと同じ。

「量は質に転化する」と言われるが、ある程度当たっている気がする。

読む立場のバリエーション(3/4)

◆無意識の例

- ・右は校了時のゲラ。
- ・都合上1/4切り出した。
- ・見た瞬間に怪しいと感じる。

講演当日に投影

読む立場のバリエーション(4/4)

- ◆嗅覚が磨かれると察知できるようになる

講演当日に投影

校閲の例

講演当日に投影

どのように魅力品質を引き出すか(1/3)

◆ 読者は何を求めているか

大村平先生の「はなしシリーズ」は難しい内容を平易な例示と軽妙な語り口で解説し好評を博した。なかでも『統計のはなし』は累計21万部突破のロングセラー。



どのように魅力品質を引き出すか(2/3)

- ◆ 読者は何を求めているか

講演当日に投影

どのように魅力品質を引き出すか(3/3)

◆出版は弱者の側に立つビジネス

専門書においては、いわゆる「味のある文章」であることよりも平易であることが求められている。

小説やエッセイとは異なり面白さを求めているのではなく、品質管理だったり、ソフトウェア工学だったり、統計学だったりとそれぞれの専門分野における読者の悩みや疑問を解決するコンテンツを提供することが専門書出版社の役割と考え、著者に働きかけている。

著者が書きたいことよりも読者が知りたいことを引き出す。

7. 難しい原稿に当たったとき

- ◆部分の理解と全体を俯瞰した理解
- ◆著者の文章の癖をつかむ
- ◆難解な文章を読み解くコツ
- ◆どうしてもわからないとき

部分の理解と全体を俯瞰した理解

頭から読んでわかればいいのだが、そうは問屋が卸さないことがある。

そういうときは、部分から入って全体を理解しようと努める。その後、全体を俯瞰しつつ部分を理解するようにする。

この双方向によって矛盾が見つかったり、不備が見つかることがある。

全体把握からできればよいが、全体を理解できるほど上等な頭を持ち合わせていないので苦労している。目次で全体をイメージできる人がうらやましい。

著者の文章の癖をつかむ

ここでいう癖とは言い回し(ただし、誤用の場合がある)や、思考パターン(論法。ただし、矛盾している場合がある)などを指す。例えば、結論を先に述べるか、最後に述べるか、人それぞれ。

ちなみに、著者の癖がつかめないと、文章のリライトはできない。「著者が言いたいことを読者にわかりやすくなるようにする」には必要。

難解な文章を読み解くコツ(1/6)

- ① キーセンテンスは何なのかに注力する
- ② 接続詞(接続表現)に敏感になる
- ③ キーワードに着目する
- ④ 著者の用語定義を正確に理解する

難解な文章を読み解くコツ(2/6)

◆キーセンテンスは何なのに注力する

通常、キーセンテンス(key sentence)は段落ごとにある。それは冒頭か末尾にある。世の中で一般書として売られている本はたいていこれが意識されている。

ところが、原稿ではいかにもPowerPointの箇条書きをつなげただけという文章に出くわす。箇条書きでは、大きな意味の塊がわかりにくいので流れをつかめない。箇条書きが有効なのは、例示のように並列できる文章。

難解な文章を読み解くコツ(3/6)

◆接続詞(接続表現)に敏感になる(1/2)

キーセンテンスはどのような接続詞(接続表現)でつながれているか、すなわち、論理構成はどのようにになっているのかを読み取る著者の思考パターン(くせ)がわかる。

もっとも、原稿では適切な「接続詞」が遣われていないことがあるので、編集者の仕事はもう少しややこしくなる。したがって、編集の仕事は時間がかかる。

【参考文献】 以下は接続詞の使い方の勉強になった。

石黒圭『文章は接続詞で決まる』(光文社新書370、光文社、2008年)

野矢茂樹『論理トレーニング101題』(産業図書、2001年)

難解な文章を読み解くコツ(4/6)

- ◆接続詞(接続表現)に敏感になる(2/2)

【ポイント】

講演当日に投影

難解な文章を読み解くコツ(5/6)

◆キーワードに着目する

ある段落なり、ページなりで頻出する文言は、読解していく上で重要なキーワードであることが多い。

もっとも、文章が下手ということもある。

難解な文章を読み解くコツ(6/6)

◆著者の用語定義を正確に理解する

一般語にもかかわらず辞書にはない意味を定義して、独自の主張を展開する原稿がある。辞書にない意味というのは大げさとしても、**著者の用語定義にもとづいて原稿は書かれていることに注意する。**

講演当日に投影

どうしてもわからないとき

どうしてもわからない文章があれば著者に聞く。わかるまで聞く。
自分の理解は正しいのか確かめるために、「おっしゃったことはこういう意味ですか？」と問い合わせる。正しい理解ができれば、言い換えを提案することは比較的簡単。

若い頃、山口忠夫部長に原稿でわからないことを質問すると、決まって「著者に訊け！」と指導された。私も部下に同じことを言っている。山口部長は大村平先生を見出した名編集者。『統計のはなし』は累計21万部のロングセラー。

ちなみに、相手の言っていることを繰り返すことは「傾聴」のテクニックの一つ。これには「自分の話を聞いてくれているんだ」と思わせる効果があるので、著者との絆が深まる。

8. 編集者に求められる能力

- ◆ 忍耐力
- ◆ 日本語を操る能力
- ◆ コミュニケーション能力

忍耐力

講演当日に投影

日本語を操る能力

講演当日に投影

◆周回遅れの編集者が実践したこと

講演当日に投影

コミュニケーション能力

講演当日に投影

◆編集者は接客業

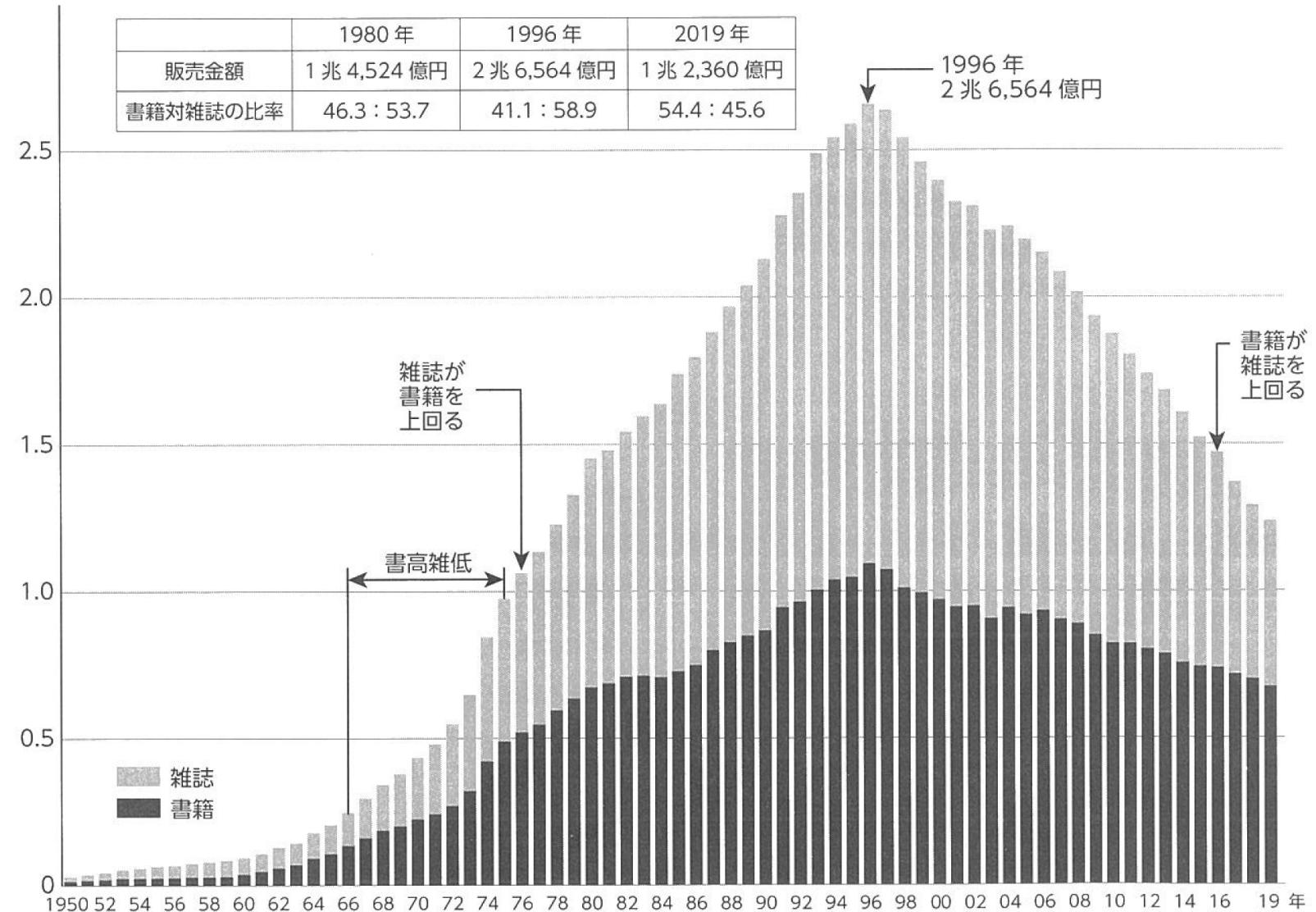
講演当日に投影

9. 出版界の現状とお願い

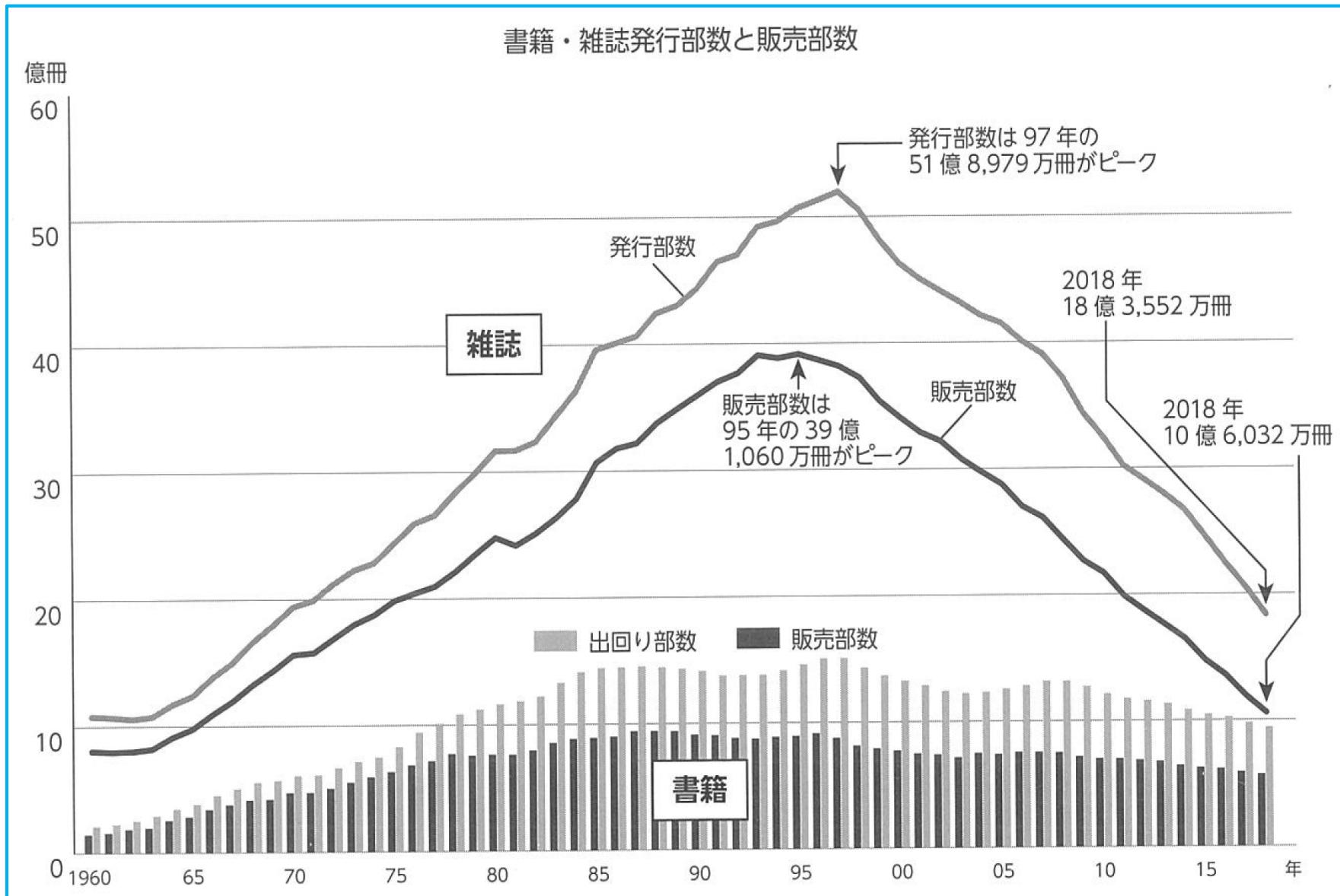
- ◆出版物推定販売金額
- ◆書籍・雑誌発行部数と販売部数
- ◆出版文化へのご支援を

兆円

出版物推定販売金額



出典) 公益社団法人全国出版協会『全国出版協会70年史』2020年5月、p.54



出典) 公益社団法人全国出版協会『全国出版協会70年史』2020年5月、p.56

出版文化へのご支援を

文化的な活動はパトロンの存在があってこそ成り立つ。芸術の世界を見れば納得いただけるのではないか。

かつては大学教育などにおいて教科書を学生の方々に買っていただく、企業教育においては社員に配布するということが行われていたが、それがコピー機などの複製する技術の一般化とともに漸減している。また、大学であれば教員が作成した資料が教科書代わりということもあるのではないか。

新刊書をお買上げいただくことは、文化的な活動の支援につながる。出版社の多くが市場規模が小さいため採算をとれそうにない企画であっても社会貢献として出版している。

出版社という文化機関の存続と著者の執筆意欲が高まるようにご支援いただきたい。

拙い講演にお付き合いいただきまして

ありがとうございました

日科技連出版社 Webサイト <https://www.juse-p.co.jp/>

社長ブログ <https://ameblo.jp/jusepress-president/>

公式Twitter <https://twitter.com/jusepress>